はしがき

本書は、音楽フェスティバル（以下、フェス）、とりわけ地域に根ざしたローカルフェスについて書いたものである。

フェスは、毎年同じことを繰り返しているように見える。同じ季節に、同じ場所で開催され、私たちは「今年もフェスの季節がやってきた」「今年もこの場所へ戻ってきた」と語る。

もちろん、それは間違いではない。一度限りで姿を消すものも少なくないなか、一〇年、二〇年と続くフェスには、それだけで大きな意味がある。毎年開催されることで、フェスは信頼を積み重ね、少しずつその地域に根づいていく。人々はそこで再会し、笑い合い、音楽とともに季節の巡りを感じる。継続は、フェスにとってかけがえのない価値である。

しかし、それは、決して「同じことを続ける」ことではない。

同じフェスでも出演者は毎年変わるし、出店する飲食店も、会場の使われ方も変わる。諸事情によって、会場そのものが変わることもあるし、雨の日もあれば晴れの日、風の日もある。もちろん、私たちの音楽の好みやライブの楽しみ方も変わるし、友人や恋人、家族といった一緒にフェスに行く顔ぶれも変わっていくだろう。フェスも、それを取り巻く状況も、そしてそこに集う私たちも、絶えず変化しているのである。

私はこれまで約三〇年にわたり、いくつものローカルフェスを訪ね歩いてきた。毎年、初めてのフェスを訪れる一方で、同じフェスにも何度も足を運び、会場を歩き、主催者や出会った人に話を聞き、フェスについて考えてきた。

本書の出発点となったのは、ローカルフェスが地域社会にどのような役割を果たしているのかという問いである。もちろん、一度きりのイベントが地域や社会を劇的に変えるわけではない。当初は、だからこそ、継続することに意味があると考えていた。しかし調査を重ねるうちに、私の関心は継続そのものよりも、その過程で起こる変化へと移っていった。

ローカルフェスは、完成された仕組みではない。毎年試行錯誤を繰り返し、その時代、その土地の状況に合わせて少しずつ姿を変えていく営みである。ある年に成功した方法が翌年も通用するとは限らず、小さな失敗や偶然の出会いが、次のフェスを大きく変えることもある。同じように見えて、絶えず微調整が行われており、それによってフェスは毎年少しずつ違う姿をみせるのである。

本書が描こうとするのは、その変化である。ローカルフェスは、単に人を集めるイベントではない。それは、音楽をきっかけに、人々がその地域にある資源を使い、そこに新たな意味を与え、これまで出会わなかった人や組織を結びつけていく実践である。そうした積み重ねは時にまちの見え方そのものを変えていく。

ローカルフェスには、全国の動向を俯瞰（ふかん）することで見える全体像もあれば、一つひとつの事例を丁寧に追うことで見える姿もある。本書では、その両方の視点を行き来しながら、ローカルフェスが地域社会との関係のなかで、どのように変化しながら続いてきたのかを辿る。それは、音楽と社会の関係を考えるためのひとつの手がかりとなるだろう。